

1920～30年代における日本の『国際評論』：米田實の言説を中心として

伊藤信哉（神田外語大学非常勤講師）

問題設定

◇「日本社会の国際化」はいつ始まったのか？

人・モノ・制度・資本……情報

◇海外情報の伝達手段（媒体）の発展と変遷

：今日ではテレビ・インターネットなど多様なメディアが併存

：20世紀の前半は活字媒体（新聞・雑誌）が中心

→本報告では、この活字媒体を通じた海外情報の伝達についてみてゆく。

◇海外情報が社会にもたらすもの

：私の専門は日本政治外交史→なぜこんなテーマに注目するのか？

：多くの研究者は政策決定者などに注目

：しかし、世論の動向は政策決定にも重大な影響（瀋陽事件）

：海外情報の伝へられ方と、社会の受け止め方、それが政策に及ぼす影響に興味がある

1. 国際報道システムの整備と「国際評論」の出現

◇変化の時期：19世紀末～1920年代

◇変化の背景：日清・日露戦争と日韓併合、第1次世界大戦など

◇海外情報の2つの形式：「国際報道」と「国際評論」

◇国際報道システムの整備：新聞社における「外報部」設置

東京朝日新聞：1911年（明治44年）に外報部を新設

国際通信社の創設：1914年（渋沢栄一らが発起人・外務省後援）

◎国際報道の特徴…匿名・短文・客観的事実の伝達が中心

→個々の事実の意味が掴みにくく、複数の事実の関連が判らない

……専門家の解説が必要

◇専門雑誌の創刊

『外交時報』：1898年（明治31年）

『国際知識』1920年（大正8年）

◎国際評論…著者が前面・長文・事実の伝達+ α （解説や政策論など）

2. 「国際問題評論家」の登場

◇主な出自

・外報関係のジャーナリスト：米田實・清沢洌

・国際法・外交史の研究者：有賀長雄・末広重雄

・元外交官：本多熊太郎（1926年駐独大使を最後に退官）

◇活動の形態

- ・雑誌や新聞への寄稿、講演活動などが中心
- ・専門者は少い…分野／生計の両面において

◇政治的・思想的立場

- ・国際協調を唱えた者ばかりではない

3. 米田實—その言説の特徴—

◇米田實（まいだみのる：1878-1948）を取り上げる理由

- ・東京朝日新聞初代外報部長
→四半世紀にわたって外報部門の最高責任者の地位にあった
- ・活躍した時期の長さ／論文の数／取り上げる対象の幅広さ
- ・当時における社会的評価／世論に及ぼした影響

◇米田の経歴

1896年に、勝海舟の援助によってアメリカ西海岸に渡航

オレゴン大学・アイオワ大学などで外交史・国際法を修める

現地の邦字紙『日米』の創刊メンバー・編集長

1907年 帰国

1908年 東京朝日新聞社に入社

1911年 同社の初代外報部長となる（～1923年）

1915年 ロンドン特派員（～1916年）

1920年 明治大学教授（外交史担当）（～1948年）

1922年 法学博士

1922年 論説委員長

1924年 編集局顧問を兼任

1926年 国際法学会評議員

1933年 東朝を定年退社、執筆・研究活動に専念

1948年 逝去

◇言説の特徴（徳富蘇峰／吉野作造との比較を中心に）

- ・圧倒的な情報量
ex. 排日移民問題への反応

- ・多面的な視座の提示
ex. 米国政治への評価

- ・バランスのとれた思考
ex. ウィルソン主義に対する態度

◇言説に対する評価

- ・判断材料を得るためには非常に有益
- ・行動の指針を求めると期待外れの場合が多い
- ・政策の唱導を控え、言論弾圧を免れた（？）姿勢をどう評価するべきか

今後の課題

◇他の論者にも目を向け、それとの比較を通じて、

- ①当時の国際評論界のなかでの米田の位置づけをおこなう
- ②当時の国際評論の実態のより精緻な解明する

さらに

◇当時の評論が、世論や政策決定に及ぼした影響の解明にも努めたい